

# 琥珀い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

農業の次の一手

91

2017 November

# 農業の次の一手

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていってみたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

# 碧い風

あおいかぜ

91  
2017 November  
contents

- 3 **視点** 産業として農業を育てる抜本的な改革が必要 株式会社ファーム・アライアンス・マネジメント 代表取締役 松本武
- 6 グローバルG.A.P.を取得しリスクを防ぐ仕組みを強化 有限会社援農甲立ファーム（広島県安芸高田市）
- 8 GIS互換のITシステムで生産・経営を効率化 株式会社夢ファーム（岡山市）
- 10 独自のITシステム構築で遠隔地の農地を管理 曾田園芸（島根県出雲市）
- 12 農業の成長産業化に向けブランド化や輸出を支援 中国地域農商工連携協議会（広島市）
- 14 「地域に生きる企業家群像」91 株式会社さんびる 代表取締役社長 田中正彦（島根県松江市）
- 18 「キラリ、輝く元気企業」64 鳥取を拠点にITで地方に元気を創出するLASSIC（鳥取市）
- 20 「夢紡人／ゆめつむぎびと」37 故郷・萩を拠点に独自のテーマを追求し作品を撮り続ける下瀬信雄さん（山口県萩市）
- 23 「この名酒にこの一品」14 純米大吟醸 龍勢 八反伍拾 牡蠣の塩辛 マスカルポーネチーズ（広島県竹原市）
- 24 「近現代芸術再発見」7 平櫛 田中（岡山県生まれ）「1872～1979」
- 26 「古典に学ぶ」2 明君家訓 武士はどうあるべきか 東京大学史料編纂所教授 山本博文
- 28 「山をあるく」2 大山（鳥取県）



●表紙写真：有限会社援農甲立ファームのアスパラガスの収穫風景 写真：芥川 博之  
●目次写真提供：株式会社夢ファーム、中国経済連合会、佐野 明美、渡辺 久徳、芥川 博之  
●表紙デザイン：くほらだいじゅ 大樹（広島市在住）

\*本誌は再生紙を使用しています。

# 農業の次の一手

## 産業として農業を育てる 抜本的な改革が必要

視点

株式会社ファーム・アライアンス・マネジメント 代表取締役 松本武

### 農業の主力は七十歳前後 担い手構造の危機的状况

農林業センサスによると、二〇一五年（平成二十七年）年の基幹的農業従事者



■基幹的農業従事者の平均年齢の推移 (単位:歳)

	2000	2005	2010	2015
全国	62.2	64.2	66.1	67.0
北海道	54.4	55.6	56.9	57.4
東京都	62.6	64.6	66.6	67.5
東北	61.5	63.4	65.5	66.9
北陸	64.6	66.6	68.4	69.2
関東・東山*	62.2	64.5	66.4	67.2
北関東	61.9	64.2	66.0	66.7
南関東	61.4	63.7	65.7	66.5
東山	64.1	66.3	68.4	69.1
東海	64.0	65.9	67.8	68.5
近畿	64.0	65.5	67.5	68.0
中国	67.0	68.8	70.5	71.1
山陰	66.5	68.6	70.1	70.7
山陽	67.3	68.9	70.8	71.3
四国	63.2	65.0	66.8	67.7
九州	60.5	62.5	64.5	65.7
北九州	60.1	62.2	64.3	65.6
南九州	61.2	63.2	64.9	66.0
沖縄	61.9	63.1	64.3	65.2

出所:農林業センサス(農林水産省) ※東山…長野県、山梨県

の全国平均年齢は六十七・〇歳、県によつては七十歳を超えているところもあり、日本の農業の担い手は七十歳前後が中心になりつつある。七十歳が主力の産業と聞いて、皆さんはどう思われるだろうか。製造業や流通業など、他の産業だったら、非常にまずい状況だと思はずだろうか。

農家の高齢化は、二十年以上前から予見できていたが、担い手構造が変わらないまま、平均年齢は上がり続けていった。この間、状況を改善する政策

品種にも序列がある。イチゴには、福岡のあまおう、栃木のとちおとめ、佐賀のさがほのか、熊本のひのしずくなどの品種があるが、熊本が国際認証を取って、とてもおいしいひのしずくを生産したとしても、その市場価格があまおうを超えることは極めて難しい。つまり、品種、産地で評価が

### 努力が価格に反映される 正当な市場に

農業の産業化を妨げる障壁の一つに、流通構造の問題がある。現在、政府は農業競争力強化プログラムで卸売市場法を抜本的に見直し、合理性のない規制を廃止する方針を打ち出しているが、市場には目に見えない序列があり、それが産地や農家の成長力をそいできた。例として挙げられるのが、出荷奨励金だ。野菜を市場に卸すには、八・五%の卸売手数料がかかるが、品物によって、特定の産地に出荷奨励金が支払われている。

が打ち出されたとはとてもいえない。よく、日本の農業を守るというフレーズが聞かれるが、担い手という資源がないまま籠城しても自滅するだけである。それくらい日本の農業は危機的な状況にあり、農業を産業として育てていく抜本的な改革が求められている。



(右)松本農園は2006年に農業法人として初めて生産情報公表JAS規格の認定を取得。農作物のパッケージ包装も自で行い、識別番号やQRコードをつけ、消費者が生産情報をインターネット上で確認できるようにした  
画像提供:有限会社松本農園



識別番号

(左)当時開発した生産情報管理システムでは、使用した肥料や農薬だけでなく、作業日時や内容も全て公表  
画像提供:有限会社松本農園

固定されてしまっているのである。

これでは、他の産地でいくら品質の優れた野菜を作っても、国際認証を取って安全な環境で生産しても、正当な評価がされず、産地や農家、品種の格差が埋まらないままだ。努力をしても無駄だと分かっていたら、誰も努力しなくなる。商品の価値を正當に評価する本来の市場の機能が果たされなければ、努力している農家を儲けさせることはできない。

また、日本の市場の衛生環境やセキュリティは先進国中で最も低いレベルにあり、荷物の盗難や行方不明も起っている。昨今議論の的になっている豊洲市場は、外部からアクセスできない日本初の閉鎖型市場だが、荷物の出入量を一致させる閉鎖型市場は、欧米では以前からスタンダードになっており、これからオリンピック・パラリンピックを開催しようという日本の認識がどれだけ甘かったかを如実に示している。

## 規模拡大で直面する マネジメント問題

農業の産業化には、農家のマネジメントが不可欠である。

私が化学メーカーを辞めて、一九九五（平成七）年に実家の有限会社松本農園に入社したところ、全農地は十五ヘ

クタールで、周年出荷を行うため契約

農家から集荷した分が売上額の七割を占めていた。しかし、口約束では農薬誤使用などの問題があったときに責任の所在が不明確であり、品質も不均一で経営的なリスクが大きかったため、徐々に契約を解除し、自社生産規模の拡大を進めた。その結果、二〇一〇（平成二十二）年に農地は五十ヘクタール、自社生産比率は九十五％に達した。農地は三・三倍に広がり、利益は一桁分増え、利益率も大幅に上昇した。また、自分たちでプライドを持って生産し、原価を管理する必要性も実感した。

一般的に生産は規模を拡大するほど単位あたりのコストが右肩下がりになる傾向があるが、実際に農業法人を経営してみても気付いたのは、農業ではある一定規模を超えるとコストも上がり始めてしまうことである。米麦大豆では四十ヘクタール、露地野菜では二十ヘクタール、施設園芸では二ヘクタールあたりが分岐点と思われる。その要因は、人、モノ、お金の管理が複雑になるからだ。露地野菜の二十ヘクタールは、スーパーマーケットなどと直接取引する場合の最低限の規模だが、これを超えると、手続きが増え、雇用労働力も必要になり、経営者が生産ではなく管理に時間を割かれるようになる。

誰が、どれくらいの量を、どれくらいの範囲に、何の目的で散布したかを必ず入力する。入力した目的によっては、収穫までに待つ日数が指示される。責任者である作業前確認者は誰か、使った機材、農薬散布後のタンクの清掃の担当者、その日の天気も入力する。機材まで入力するのは、機材の不調により農薬が多く散布されることで農薬の残留事故が起ってしまう可能性があるためだ。こうした入力情報が管理システムに蓄積され、さらに収穫物に紐付けされる。

収穫した野菜にはロット番号がつけられ、その番号から、どの畑でとれたか、その畑はいつ何時に耕され、どんな肥料がどのくらい撒かれたか、誰が誰の指示によりどの機材を使ったか、誰がその作業を確認したかなどの情報を得ることができる。仮に玉ねぎの残留農薬事故が発生したとしたら、その商品のロット番号から、原因を追究し、もし農薬を散布した作業者が原因であれば、その人だけでなく指導者も問われ、理解の不一致をなくすために、本質的に理解できる仕組みをもう一度つくる必要がある。情報管理は、リスクマネジメントだけでなく、コスト管理など経営改善にも大いに役立つ。これらの側面が織り込まれたグローバル

## 国際認証の本質は 農業のマネジメント

松本農園でこうした壁にぶつかったとき、私が目を付けたのが、国際認証だった。松本農園の市場出荷量は少なく、直接取引がほとんどだったが、取引先によって減農薬の基準や、記録しておく情報、提出する書類の様式がバラバラだった。また、A社、B社、C社のバイヤーへの説明にもそれぞれ多くの時間を割かれていた。対応に頭を悩ませていたときに、グローバルG.A.P. (Good Agricultural Practices) を知り、これを取得すればさまざまな取引先にスムーズに対応できると考えたのである。

グローバルG.A.P.を取得するためには、チェックリストを調べていくと、この認証には農業のマネジメント力を向上する要素が織り込まれていることに気が付いた。

この認証の一番の特徴で、最も重要な点は、リスク評価である。労働安全や環境保全を含め、農作物の生産プロセスや取り扱いにおいて、どこにリスクがあるかを探し出し、改善していく体制をつくることだ。単にチェックリストの項目をクリアすれば良いわけではなく、プロセスに潜むリスクを現場

G.A.P.を取得した農家はマネジメント能力が上がって規模拡大にも対応しやすくなるはずだ。そして、取得する農家が増えれば、農業は必然的に若返りが進むだろう。

この程度のトレーサビリティは、他の産業ではもはや当たり前のものとなっている。事故は起こる。安全安心をイメージで語ってはいけない時代になっっているからこそ、農業を特別視することをやめ、他の産業と同じように客観的に評価する必要がある。

## 海外展開には リサーチが必要

日本の農作物は高いポテンシャルを持っているが、海外展開に必要なマーケットリサーチやターゲット設定はまだまだ足りていない状況である。

例えばトマトは、海外では生で食べず、ポイルすることがほとんどである。そのため、日本で主流の桃太郎は、ポイルするには果肉が柔らかすぎて、傷みやすく売れない。果物は味が求められるが、味を追求しすぎると棚持ちが悪く、ロス率が高くなる。コモディティ商品こそ物流耐力が求められる。こうした現状を知った上で、どんな品種改良を行うべきかの戦略が必要となるだろう。



生産から出荷までの一貫体制、高いトレーサビリティを備えた管理システムが評価され、松本農園は2012年の第1回グローバルG.A.P.サミットでアワード(大賞)を受賞した  
写真提供:株式会社ファーム・アライアンス・マネジメント

で察知し、未然に防ごうとする姿勢や、不測の事態を見越して柔軟に対処していく感覚、リスクマネジメントを実践する実務者の哲学が問われているのである。

私たちが二〇〇九（平成二十二年）に開発し、二〇二二（平成二十四）年の第一回グローバルG.A.P.サミットでアワード(大賞)を受賞した農業生産情報管理システムは、こうしたリスクマネジメントのポイントを反映し、高いトレーサビリティ能力を備えている。

例えば、農薬を散布した際には、何月何日、何時から何時まで、どの畑に、

## 農業×フィンテックの可能性

また、農業金融も見直されるべき段階にきている。現在、個人事業主の農家は、銀行から融資を受けられず、資金調達先はJAバンクか日本政策投資銀行に限られている。産業の成長戦略を描くには資金調達の選択肢拡大が欠かせない。そこで今、私たちが進めているのが、農業でのフィンテックの<sup>※3</sup>開発である。金融機関が評価をしなくても、フィンテックのサービスの中で事業性評価を機械的に行う仕組みを考えている。農業フィンテックは、アジア、アフリカも融資先のマーケットになり、巨大化する可能性を秘めているだろう。こうしたサービスで、日本の農業が世界を先取りすることも可能だ。

日本の農業にポテンシャルはある。農家の選択肢を増やし、産業として成長させていくことが今求められている。

### profile

松本 武(まつもと・たけし)  
1966年熊本県生まれ。旭化成工業株式会社に(現・旭化成株式会社)勤務後、1995年に家業である有限会社松本農園に入社。同社は、2006年に農業法人として初めて生産情報公表JAS規格の認定を取得し、2007年に国内で3番目にグローバルG.A.P.を取得。2012年に同社を退社し、農業コンサルティングの株式会社ファーム・アライアンス・マネジメントを設立。2013年まで内閣府規制改革会議農業ワーキング・グループ専門員を務めた。

※3…金融(finance)と技術(technology)を組み合わせた造語。スマートフォンを使う決済・資産運用、ビッグデータ、人工知能など最新技術を駆使した金融サービス。

※1…第三者審査による国際認証。農産物の安全性を評価する基準として世界中に広がっている。

※2…商品やその原材料等を個別に識別し、生産から加工、流通、販売、廃棄までの過程を記録することで、商品からさかのぼって履歴情報を確認できるようにすること。

# グローバルG.A.P.を取得し リスクを防ぐ仕組みを強化

## 有限会社援農甲立ファーム 《広島県安芸高田市》

二〇一七（平成二十九）年二月、有限会社援農甲立ファームが広島県内で初めてグローバルG.A.P.を取得した。アスパラガスや白ネギ、ミニトマトなどを生産する同社では、数年前から取得に向けて準備を進め、社内ミーティングや検討会を重ねて意識改革や体制づくりに取り組んできた。



アスパラガスやミニトマトをビニールハウスで生産

### 広島県産アスパラガスを 先駆けて生産

援農甲立ファームが設立されたのは二〇〇二（平成十四）年。県の圃場整備事業が始まったころ、地元の三十〜四十代の三人で立ち上げた。そのときの一人で、専業農家だった光永直義さんが現在も代表取締役を務めている。

「法人化するときに、JA（農業協同組合）に声をかけられ、アスパラガスの生産を始めました。当時は長野県が主産地でしたが、この地域でもアスパラガス産地化が進められており、安定的かつ高い収益が見込まれると思ったからです」

国内生産量第三位の佐賀県の農家を度々視察し、植え付けのタイミングやハウス内の作業効率化を学んでいた。現在の総農地面積は、約三十七ヘクタール。アスパラガスやミニトマトを生産するビニールハウスは三十六棟あり、

### 法人設立後から 国際認証取得を検討

同社では、法人設立後からグローバルG.A.P.の前身であるユーレップG.A.P.の取得を検討していた。本格的に準備を始めたのは数年前からで、約二年間にわたって綿密な社内打ち合わせを行い、その後、グローバルG.A.P.の取得を支援するコンサルタントである株式会社ファーム・アライアンス・マネジメント（東京都）の支援を受けながら、勉強会を重ねてきた。検査を受ける数カ月前には、新たに事務作業の経験がある社員を雇って、資料整理や書類作成などを行い、審査項目への対応を進めた。

国連食糧農業機関によれば、GAP（Good Agricultural Practices）とは、農業生産の環境的、経済的および社会的な持続性に向けた取り組みであり、安全で品質の良い食品および非食品の農産物をもたらすものと定義される。国内では農業界と流通業界が共同で開発したJGAPや都道府県版のGAPがあるが、現在国際標準となっているのがグローバルG.A.P.である。牛のBSE（牛海綿状脳症）問題や残留農薬問題などを契機にヨーロッパで生ま



アイコ、ミドリ、サンチェリービューなど多品種のミニトマトを生産  
写真撮影：芥川 博之

れた認証制度で、現在では世界中に広がり、認証件数は世界百十八カ国で約十五万件に及ぶ。認証されればその企業がつくる農作物の品質や労働管理が国際レベルで保証される。すでに欧米では、大手流通企業を中心に、この認証がなければ商品を取り扱わない傾向が強まっており、今後のためにも取得が必要だと光永社長は考えていた。

グローバルG.A.P.は認証機関の審査員が生産現場で審査を行う第三者認証で、申請者はまずチェックリストを入手して対策を講じた上で、内部監査を実施し、本審査を申し込む。審査会社による本審査を受けた後、指導事項を修正して申告し、クリアできていれば認証取得となる。

チェックリストは二百五十項目からなり、上位の義務、下位の義務、推奨事項の三つのレベルに分けられる。こ



第三者機関による審査 写真提供：有限会社援農甲立ファーム



防除機の流量が正しく調整できているかを確認する。定期的に機械の正確性を確認する作業もグローバルG.A.P.の審査項目の一つである 写真提供：有限会社援農甲立ファーム

### あらゆるリスクを洗い出し 自分たちで考え、対策する

のうち、上位の義務は申請時点で必ずクリアしていなければならない。

援農甲立ファームでは、検査を受ける数カ月前の時点で物理的な整備を七割方終えていた。例えば、農薬保管に關しては、生産物や肥料等に触れないよう施設できる施設に保管すること、換気設備や流出防止対策を整備することなどが求められるが、そうした整備は早めに進められてきた。

対策の中でも特に苦労したのが、基準に基づく作業実施体制の整備と労働安全・作物の衛生の危険性を洗い出すリスク評価、その実施を証明する毎日の作業記録、そしてこれら業務の実施の徹底である。グローバルG.A.P.では、生産物の識別とトレーサビリティ

システムの構築が上位の義務として定められている。直接の顧客が持つ商品がどの圃場で栽培されたのか識別できること、逆に、ある圃場から収穫された生産物がどの顧客に出荷されたか識別できると、さらにその作物が

どのように生産されたかが分かる作業記録等を示すことができなかったらならない。また、衛生に関しては、生産環境でのリスク評価を文書にして毎年必ず見直し、リスクを低減させる衛生手順を見やすく提示すること、農場で働く人全員に対し、衛生に関する教育訓練を実施することなどが下位の義務に定められている。

「アスパラガス一つをとっても、作業中にどういう事故が起こる可能性があるか、事故を起こさないためには何に気を付けたらいいかなどを社内で行い出し、その検討を定期的に行う必要があります。その内容にマニュアルはないので、自分たちで考えてリストを作る体制を構築しなければならぬ。その工程が非常に大変で、これからさらに強化する必要があります」と光永社長は話す。

作業現場には、海外研修生や農業を始めたばかりの人もいる。言葉や知識の共有が難しい中で、高いレベルで意識を擦り合わせるのが求められる。

「これまでは農家が感覚的に分かっていたればよかったものでも、事細かく記録を残し、第三者に提示できる資料を作っていく必要があります。このあたりの意識改革が一番難しいのではないのでしょうか」

### 多品種生産を生かし 六次産業化を目指す

農業の担い手不足が深刻化する中、同社では長年若者の就農や独立を支援してきた。数年前からは地元女性の積極的雇用してきたため、他の農家に比べて平均年齢はかなり低い。「女性は買う側の目線で野菜を見るので、値段設定や商品価値について尋ねると、鋭い意見をもらえますね」と光永社長。今後は会社の道筋をつくるためにも、六次産業化に挑戦したいと考えている。

「自分たちで生産している小麦を使ってパンを作ったり、野菜を使ってペースト加工品を作ったりするなどいろいろと計画を立てています。アスパラガス以外にもブロッコリーやパジル、ベビーリーフなど多品種の野菜を栽培しているの、その強みを生かしたいです」



援農甲立ファームのみなさん 写真提供：有限会社援農甲立ファーム

# GIS互換のITシステムで 生産・経営を効率化

株式会社夢ファーム 〈岡山市〉

地主も面積も異なる圃場を管理するため、無償ソフトの作業計画・管理支援システムを導入。資金管理システムも開発して農業のあらゆる情報をデータ化し、効率化を進めている。



水を張らずに種を播く「乾田直播」で米を生産 写真提供:株式会社夢ファーム



JANコードをリーダーで読み込めばPMS資金管理システムに反映され、伝票も自動で作成される

## 「五百五十枚の圃場を管理

株式会社夢ファームがある西大寺地区は、JR岡山駅から東に二十分の位置にある。同社では現在約百四十人の地主から農地を借り、農作業を受託して米や麦を生産しており、圃場の数は五百五十枚以上に上る。ヒノヒカリなどの主食用米、雄町や山田錦などの酒造好適米、みなちからなどの飼料用米を生産し、米の作付面積は約五十八ヘクタールに及ぶ。畑状態の田んぼに種を播き、苗が少し成長してから水を入れる乾田直播と呼ばれる全国でも珍しい方法で生産しているのが特徴である。

代表取締役の奥山孝明さんは、大学卒業後、建築設備の現場管理の企業に就職。三十五歳のときに実家に戻って農業を学んだ後、農地を引き継ぎ、父のノウハウを経営に生かすため、二〇〇八（平成二十）年に同社を設立した。役員二人の会社だが、繁忙期の春・秋

を中心に従業員を雇っている。「当時、圃場はすでに三百五十枚あり、地主も場所も面積もバラバラでしたが、父は全て紙の地図上で管理していました。これでは大変だと思い、パソコン上で管理できる方法を探しました」二〇〇七（平成十九）年、独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構（以下、農研機構）が、GIS（地理情報システム）を利用し、圃場地図上で農作業を管理できるPMS（作業計画・管理支援システム）を開発し、ウェブ上で無償公開していた。奥山さんは早速使い始め、その後農研機構との共同開発にも携わるようになった。

## 作業状況を視覚的に把握 入力情報から分析も可能

PMSは、地理座標を持った電子圃場地図上で農作業に関わるさまざまな情報を管理するシステムである。利用者はまず地形図などから圃場図を作成し、初期設定で所有者、地番、面積など圃場に付帯する情報、品種などの作物情報、農業機具・肥料・農薬などの資材情報、作付情報・土壌成分・日々の栽培管理作業情報などの基本情報を入力する。圃場地図は、二〇一七（平成二十九）年三月にウェブサイト「全国農地ナビ」で農地台帳項目が公開さ

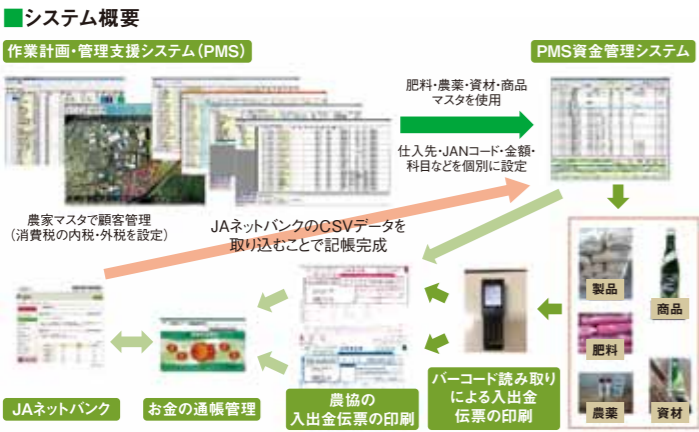
しょうか」

## 「データは将来への資産

農業の効率化の上で、最も不確定な要素となるのが気象条件である。天候や降雨量、温度や湿度が生産量にどう影響しているかはまだ十分に分析できていないが、奥山さんは未来への先行投資として、土壌中の温度や水分量を十分ごとに測る土壌センサーや気象計でデータの取得を進めている。

また、農薬散布時にヘリコプターやドローンを使用しており、PMSのペーシとなる電子地図に、電柱の位置や電線の高さなどの情報が加われば、さらに省人化が進むと話す。

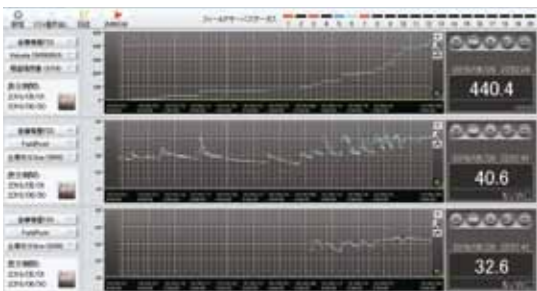
「農業に関するあらゆる情報をデータ化し、年によって変動が大きい要素を見つけて出すだけで、対策が打ち出しやすくなります。若者の農業離れが進む一番の原因は、儲からないからだと思えますが、生産性向上、経営効率化を進めれば、農業は儲かります。その努力をすることが大切だと思います」



資金管理システムにより農業に関するあらゆるお金が一元的に管理できるようになった 画像提供:株式会社夢ファーム



PMSで550枚の圃場を管理。各圃場には作業状況のほか耕作者や土地代なども登録されている 画像提供:株式会社夢ファーム



土壌センサーで深さ2cm、8cm、20cmごとに温度や水分量などを計測。将来の分析に役立てるためデータを蓄積している 画像提供:株式会社夢ファーム

それが効率化のカギになると思いますが、そうすれば、機械や圃場の位置情報から、前年の作業をリロードして自動で機械を動かすといった、製造工場の機械化に近いことが実現できるのではないで



代表取締役の奥山孝明さん

れたことで取得が容易になった。圃場管理画面では、圃場ごとの作付状況や作業進捗状況がマップ上で色分けされた状態で示される。各圃場には、地番や所有者、耕作者、地籍面積、水張面積、土地代、借用期間などの情報を登録でき、各項目で一覧表示もできる。例えば、各圃場に水利の日時や時間の情報をあらかじめ登録すると、その日に配水される圃場がどれか一目で確認できる。さらにPMSではデータベースから資材在庫管理や、受託作業の料金計算、利用権・共済申請書類の作成なども可能だ。

「情報を毎年入力していけば、たくさん収穫できた圃場とそうでない圃場の違いを見比べて要因を推測し、翌期の生産に生かれます。PDCAサイクルを繰り返していけば、生産や経営はもっと効率化できるはずですよ」

## 「入出金もPMSで一元管理

国の事業に採択後、同社と株式会社ルークシステム（岡山市）はPMSを利用した資金管理システムを開発した。同社では、生産のほか、米や酒、肥料や農薬などの販売も行っている。これまでは商品や資材を販売後、入出金伝票への記入など手書きの作業が多く、PMSと会計ソフト情報の突き合わせも必要だった。このソフトにより、PMSのマスタを活用してあらかじめ設

# 独自のITシステム構築で 遠隔地の農地を管理

曾田園芸 《鳥根県出雲市》

冬に咲くクリスマスローズは、夏の暑さを避けるため高冷地で数カ月管理する山上げが必要となる。曾田園芸では、離れた農地の状況を日々確認するため、ネットワークカメラによる独自の遠隔管理・監視システムを構築した。優れた民生品を使用することで、費用対効果の高いシステムとなっている。



避暑のため夏の間はクリスマスローズを鳥根県庄原市高野町に山上げする



花の種類が豊富なクリスマスローズ



曾田園芸農場長の曾田寿博さん

## 遠隔操作で水やり 費用と時間のロスを削減

出雲空港が立地する出雲市斐川町は、鉢花園芸が盛んな土地として知られる。昭和二十年代後半に数戸の農家が先駆的に栽培を始め、現在では西日本有数の産地といわれるまでになった。鳥根県の農業技術センターと産地で開発したオリジナル品種のアジサイである「万華鏡」や「銀河」は、国内最大の新品種コンテストで「フラワー・オブ・ザ・イヤール」を受賞し、その美しさと品質は高い評価を受けている。

曾田園芸では昭和五十年代からシクラメンの生産を始め、現在では年間を通して主にシクラメン一万八千鉢、アジサイ八千鉢、クリスマスローズ八千鉢を生産している。

冬の貴婦人とも呼ばれるクリスマスローズは、下向きに大きな花を咲かせ、人気の鉢花で、二月ごろから店頭に出る仕掛けで、遠隔操作で水やりができるようにした。灌水のタイミニングは、指標となる植物二カ所に乾くと白くなる鹿沼土を敷き、それをIPカメラで撮影して確認するようにした。

今年からは、アメリカのベンチャー企業が開発した最先端のソイルセンサーを使い、土壌環境を計測。土壌に直接配置されたセンサーから十分一回のペースで取得された土壌の栄養状態と水分量、大気的光量・温度のデータは、センサーに内蔵されたWiFi機能により、ネットワークに接続され、サーバーに蓄積される。スマートフォンからデータを見れば、土壌の状態を確認できる仕組みだ。曾田さん

並び始める。種播きから出荷までに二年半以上を要し、暑さに弱いため、出荷の前年の夏には、高冷地へ移動して避暑させる山上げが必要になる。山上げによって、平地での栽培よりも一月花を早く咲かせることができ、より高い単価で売買される。また、曾田園芸の場合は、アジサイの栽培と時期が重ならないようにするためにも、クリスマスローズの山上げが必須となっていた。

「八年前からクリスマスローズの生産を開始し、二〇二二（平成二十四）年から試験的に山上げを始めました。当初は赤山高原の農地に山上げをしていましたが、往復五時間かけて週三回水やりに通うのは、交通費、人件費、時間のロスの観点からも難しいと判断。遠隔操作で水やりができる方法を模索してました」と農場長の曾田寿博さんは振り返る。

当時、農業関連の見本市では一般農家向けの遠隔システムが出回り始めていたが、温度や湿度を測る環境センサーだけで数十万円と、数カ月の山上げ期間では費用対効果が得られない高額なものばかりだった。また、メーカー専用用品では、故障やトラブル時に管理業者を呼ばないと解決できないことも気掛かりだった。大規模事業者をターゲット

はこのソイルセンサーと専用アプリを使い、水分量や土壌の窒素成分量から水やりのタイミニングを計っている。「温度を測るセンサーが数十万円ですべて売られていた数年前に比べて、格安で利用できる製品やサービスが増え、選択肢もあって、『データを取れば生産にかせる』という売り文句は聞きますが、どうしたら実際に生産に生かせるかが分かるマニュアルはありません。自分たちに本当に必要な機能は何か、機械を入れてどれだけ利益が上がるのかを明確にして、費用対効果があるものを選んで導入・運用していくことが大切だと思います」

## 優れた民生品の登場で 灌水装置の起動も容易に

トにした専用用品には導入のメリットが感じられなかったが、機能が優れた一般家庭用製品が多く出回っていたため、曾田さんはスマートフォンと市販の機器を利用した遠隔管理・監視システムを独自で構築することにした。

曾田さんが構築したシステムは、スマートフォンとアプリ、IPカメラ（ネットワークカメラ）に市販の機器を組み合わせたものだ。IPカメラとは、インターネット上の住所といえるIPアドレス付きのカメラで、このカメラで撮影した画像や動画はインターネット経由でパソコンやスマートフォンからいつでも見ることができ、これを農場に設置してインターネットにつなげば、世界中どこからでも農場の様子が確認可能だ。

試作一号機ではIPカメラでハウス内を撮影するとともにデジタル温度計の画面も映すように設定。温度や湿度、風向きや天気を視覚的に観察した。

試作二号機では、首振り機能のあるIPカメラを使用した。首振りの動力を利用して糸を巻き取り、家庭用タイマーを動かして電磁弁を解放し、灌水装置を起動させる仕組みとした。

一号機の改良版では、交流100V

の電源をスマートフォンでオン・オフできるリモートスイッチを追加で組み合わせた。

「これまでも直流十二Vに対応した機器はありましたが、このリモートスイッチは交流100Vに対応しているため、ポンプや電磁弁を動作させて、灌水、照明、循環扇、暖房機器など幅広い機器を操作することが可能になりました。改良版の製作費は一万三千元弱。こうした優れた家庭用製品が出てきたことで、遠隔操作・監視システムの導入にめどが立ちました」

実際に試作機で試験した結果、山上げ先への移動回数を前年の二十三往復から四往復へと大幅に削減できた。

## データが生産にどう生かせるか 費用対効果の検討が必須

山上げの農地は、二〇一五（平成二十七年）年に中国横断自動車道尾道松江線が全線開通したタイミングで広島県庄原市高野町に移転した。この年から、試作機でのノウハウを基に、三方所のハウス（面積七百平方メートル）で遠隔灌水システムの本格的な運用を開始した。

灌水はスプリンクラーで行い、家庭用電源リモートスイッチ「WeMo」で電源をオンにすると電磁弁が駆動す

### 遠隔管理・監視システムの仕組み



# 農業の成長産業化に向け ブランド化や輸出を支援

## 中国地域農商工連携協議会 《広島市》

二〇一七(平成二十九)年四月、中国経済連合会(会長・荊田知英)は、農業参入企業など十六の構成員による「中国地域農商工連携協議会」を設立した。農業の大規模化が困難な中山間地域が多く、農家の高齢化が著しい中国地域で、販路拡大に向けたプロモーションやブランディング、農産物や食品の高付加価値化を進めることで、農業の成長産業化を支援していきたい考えだ。

### 農家の高齢化が顕著

中国経済連合会と株式会社日本政策投資銀行中国支店は中国地域の農業を共同調査し、二〇一六年度に報告書を

まとめた。調査で明らかになったのは、中山間地域の多さと農家の深刻な高齢化だ。経営耕地に占める中山間地域の割合は、全国平均三十七・九%に対し、中国地域は六十八・七%と高く、特に広島県では八十七・七%に上っている。中山間地域は平地が少なく農地の面積が狭いため、農業の大規模化が難しい。さらに、耕作



訪日旅行が人気の台湾では、日本酒や酒蔵への関心も高い

社原料として使用している。

世界的な精米機メーカーである株式会社サタケ(広島県東広島市)は、地域再生・活性化事業として「豊栄プロジェクト」を発足した。地元東広島市豊栄町をモデル地区に、産官学民が連携し、人口増加や持続的な一次産業の実現、新たな雇用の創出、若者のU・イターンの促進、住民の健康寿命日本一を目標に掲げている。その活動の第一歩として、空き家を活用し、交流広場や野菜・特産品などの販売機能、レストラン機能、自転車貸し出し機能を備えた拠点「豊栄くらす」が二〇一七(平成二十九)年五月に完成した。

### 酒米の生産量増加を背景に 日本酒の海外展開を支援

最近岡山県、広島県、山口県でも生産量が増え、二〇一五(平成二十七)年の検査数量における中国地域のシェアは十六%と年々増えてきている。減り続ける一般酒に対し、特定名称酒の生産量が二〇一〇(平成二十二)年から復調していることや、山田錦が六十キロあたり約二万八千円と食用米の約三倍の価格で売れることも背景にある。こうした中、中国地域の日本酒の販路開拓をサポートするため、中国地域農商工連携協議会では今年七月、台湾で中国地域の酒のプロモーションを行った。現地での観光情報説明会・商談会のインバウンドフォーラムの開催に合わせ、日本酒およびワインの試飲や展示を行い、旅行エージェントら参

加者に酒蔵見学など観光プランへの活用を提案した。「台湾でも日本酒への関心は高く、特にこれほど多くの酒蔵が市や町ごとにあることに驚かれました。観光とセットにすることで、より多くの人に知ってもらおう機会が生まれると思います」



台湾でのインバウンドフォーラムでPRした中国地域の酒



台湾での観光情報説明会・商談会で荊田知英中国経済連合会会長(前列右から2人目)も出席して中国5県をPR

放棄地面積率は十九・五%と全国平均の倍に近く、特に中山間地域に多く分布していることが分かった。

農業就業人口は縮小が進み、二〇一四(平成二十六)年には六十五歳以上の高齢者の割合が七十六・四%に達し、実に農業就業人口の四人に三人が高齢者になった。特に、七十歳以上の割合が五十七・六%と著しく高い。「条件としては不利な状況ですが、だからこそ若返りを図り、変化するチャンスともいえます。企業の農業参入が増える中、これまでは先祖代々の土地をどこかの企業に任せることに難色を示した方が多かったのですが、農地の担い手探しが困難なため、企業に任せようという土地所有者は今後も増えてくると思います」と中国経済連合会の菅田裕喜部長は話す。

### 農地のリース自由化で 農業参入企業が増加

二〇〇九(平成二十二年)年の農地法改正により、賃貸であれば企業や法人などの一般法人でも農地を利用して農業経営を行うことが可能になった。このリース方式の自由化により、一般企業の農業への参入は改正前の約五倍のペースで増加しており、中国地域でも二〇一六(平成二十八)年末時点で三百三十二の一般法人が参入している。企業の参入の目的とされているのは、食材の品質管理や安定的な数量確保などだ。特に食の安全安心は消費者、企業にとっても重要な基準であり、かつては大量に安く仕入れる傾向が強かった小売店も、生産者の顔が見える農産物の販売に力を入れ始めている。またイオンなど、自ら農業に参入する小売企業も増えている。

協会の構成員でもあり、赤しそふりかけ「ゆかり」で全国的に知られる三島食品株式会社(広島市)は、二〇〇六(平成十八)年に農業に参入した。原料となる赤しそから一貫して栽培商品化し、安全安心の確保と高品質の原料・商品の研究開発に取り組みの狙いだ。現在の栽培面積は八ヘクタールで、生産した赤しそ、広島菜は全て自

加者に酒蔵見学など観光プランへの活用を提案した。

「台湾でも日本酒への関心は高く、特にこれほど多くの酒蔵が市や町ごとにあることに驚かれました。観光と

ずです。これからも企業の側から、販路開拓や製造加工のノウハウ活用などを行うことによって、農業の成長産業化をサポートしていきたいと思



# 社長は会社の公器である

株式会社さんびる 代表取締役社長 田中正彦 〈島根県松江市〉

## マグマは志の原点

言葉に宿る不思議な力を言葉ことばというが、企業家はその魔術師といえるかもしれない。親しみやすい人柄の奥から静かな熱が伝わり、真つすくな言葉に、聞く者はほとんど惹きつけられていく。その言葉を聞くうちに、自分の中に前向きな思いが湧き出る。企業家自身の言葉を借りれば、そのエネルギーの源こそ「マグマ」と呼ばれるものなのだろう。

「マグマは地球をつくるエネルギー。この真つ赤なマグマがなくなったら、地球という生命体はなくなってしまいます。人間にとってのマグマは命へのこだわりです。何が起るかわからないこの世界で、命があることにもつとこだわろう、マグマを持つとうというのが私の経営哲学です」と企業家は話す。株式会社さんびるの田中正彦社長である。

田中社長の命へのこだわりは、幼少期の体験に基づく。五歳のとき、黒砂糖餡がのどにひっかかり、病院に運び込まれた。逆さ吊りにしても取り出せず、直後に心肺停止になった。駆け付けた母に医師が「あきらめの言葉をかけようとしたとき、コーンと大きな音が部屋中に鳴り響いた。餡は落ち、正彦少年は息を吹き返した。「今では笑い話」と話す、この生かされた経験が

田中社長の原点にある。

## 目標を持ち、コツコツと自分に投資する

田中社長は、二九五八(昭和三十三年)鹿島町御津(現・松江市)の漁村で生まれた。

「うちは海、山、田んぼに囲まれて食べ物には困っていませんでしたが、お金はあまりなかったのです。私が小学校に上がるとき、衣服や文房具を揃えようと、母が清掃業務の仕事を始めました。そして、その勤務先が後にさんびるとなったのです」と会社との深い縁を振り返る。

小学校三年生のとき、叔父が東京で電気工事業会社を設立。帰省の度に、新品のシャツや見たこともない物をくれる叔父に、どうしたらこんな物が買えるのかと驚いた。

「社長になるにはどうしたらいいのか」叔父から返ってきた言葉は、「算数で一番になれ」だった。その言葉を信じて、近所の人に頼み込み、毎日算数を教わった。工業高校の電気科でも成績は常にトップクラスで、卒業前に新日本製鐵の就職試験を受けた。高卒者は技術職での採用が大半だが、主に大卒者を対象にした主務職で田中社長は合格した。奇跡の合格と高校で語り草になるくら

いの大事件だった。

「目標を立て、毎日コツコツと自分に投資する時間と場所をつくること。努力をするためには、遊ぶ時間なり何か犠牲を払わなければなりません。この努力は絶対に嘘をつきません。この姿勢が小さいときに身に付いたようです」

## 営業職への転身で頭角を現す

新日本製鐵で数年働いた後、父に言われて松江に戻り、電気制御盤をつくる会社に入社した。ちょうどそのころ、松江駅前に当時最も高いビルが新築中で、さんびるの前身である株式会社山陰ビルサービスがそのビルで初めて総合ビル管理業務を入札しようとしていた。

そこで白羽の矢が立ったのが、田中社長だった。電気主任技術者の資格を持っていたため、母の勤務先である同社から声をかけられ、半ば強引に入社させられる。無事に受託したが、ビル内のメーターを毎日読む仕事は、若い田中社長には面白くなかった。「こんなふうに通じているのはダメだ」と思い、何度も辞表届を提出した。母の手前やめるはずがないと高をくくられ、その辞表届がろくに読まれることはなかったが、六回目に辞表届を出した後、田中社長は次の就職先が決まったことを



働くお母さんを応援し、子どもの可能性を伸ばすさんびるアカデミー学童塾

### profile

田中正彦 〈たなか・まさひこ〉

1958年島根県鹿島町御津(現・松江市)生まれ。松江工業高校卒業後、新日本製鐵株式会社(現・新日鐵住金株式会社)に勤務し、その後株式会社山陰ビルサービス(2005年株式会社さんびるに社名変更)に入社。2006年に代表取締役社長に就任。従業員数1,373名。売上高32億3,800万円。

文: 城市 奈那 写真撮影: 佐野 明美 (島根県松江市在住)



2013年に完成した新社屋「さんさんビル」



さんさんビルに併設したイタリアンレストラン「パストグラツェ」も自社で運営



卓球の全国大会で入賞経験を持つ社員が塾長を務めるさんびるアカデミー卓球塾



オフィスは特定の席を持たないフリーアドレスで、社員は毎日パソコンと荷物を持ってその日の席を選ぶ。お互いを「さん付け」で呼び合い、田中社長も「正彦さん」と呼ばれている

会社に突き付けた。その数日後に、山陰ビルサービスの社長が家を訪れ、営業職への転身を提案した。電気の仕事が好きだった田中社長だが、周りの推薦もあり、会社に残り営業職として働き始めた。

この決断が社長業への第一歩となる。昭和五十年代後半から、米子営業所や鳥取支店でメキメキと業績を伸ばし、高層ビルなどの特殊清掃、設備管理、警備へと業態を広げ、社員が増え、お客さまが増え、仕事が面白くなった。自分を慕う部下も出てきて、自分自身の成長が実感できた。

そして二〇〇一（平成十三）年、専務取締役に就任する。創業家以外の方が役員になった初めての人事で、将来の社長就任を見込んだ出世だった。周りの社員の信頼や田中社長の強い求心力の表れでもあった。

しかし同年、田中社長はまたも生死をさまようような事態に陥る。今度は企業人としての生死だ。子会社のトラブルの責任を取り、再び表に出られるかどうか分からない空白の日々が続いた。退職を心に決めてはいたが、社員やその家族、取引先、関わる全ての人の顔が頭に浮かんで離れることがなかった。

「人生で最もつらい日々の中で、会社のあるべき姿を真剣に考えさせられました。業績面で同社を変えたのが、経営品質向上プログラムである。以前は新規営業を専属に担う精鋭部隊が年間二億円ほどの売り上げを上げていたが、バブル崩壊後は取引先の予算削減と単価競争により、仕事を取れば取るほど赤字が出る悪循環に陥っていた。

### 受注者と対等になることで おもてなしの質が変わる

「人件費を削る見積書や仕書を書けば書くほど、みな悲観的になるのです。その様子を見て、もう新規営業をやめようと思ったときに経営品質向上プログラムに出会いました。品質と価格、組織のあり方などを勉強し、うちはこのままではダメだと思ひ知らされたのです。精鋭部隊をやめ、今のお客さまに

始めました」  
経営品質とは、顧客や市場の視点から見た経営の質であり、組織が長期にわたって顧客の求める価値を創出し、市場での競争力を維持するための仕組みの良しあしである。思い切って新規

た。企業は社会の公器といわれるように、社長は会社の公器なのです。しっかりとした耳を持ち、一つ一つの行動や言葉も、正しい道を歩まなければならぬ。経営者として最も大事なことを考えさせられた日々でした」

結果として田中社長はこれまで通り働けることになった。この年の九月に会社で、良い会社をつくらう、というスローガンを打ち出す。その実現のため、田中社長は若い社員を集めて、良い会社の定義を聞いて回った。そのときに社員が出した答えが「子どもを働かせたい会社」だった。子どもを働かせたい会社とは何か。具現化する仕組みをつくるため、社員全員参加のディスカッション合宿を開いた。経営幹部もマネジメント職も、現場のキャップも皆集合し、どうやったらお客さまの満足や自分たちの幸せをつくっていくかをとことん議論した。この合宿は、翌年以降も続き、年二回の恒例行事となっている。

理想の会社をつくるための仕組みを自分たちで考え、実現していく。会社の主人公役を社員に渡したことで活力溢れるオープンな場が生まれ、それが企業文化の醸成につながった。

「それまでの私はどこかで己を中心に会社を捉えていました。しかしあるとき顧客の獲得をやめてから、不思議と業績が伸びた。やったことがない仕事でもお客さまに提案されたら勉強して実行する。この社員の姿勢がお客さまをさんびるのファンにし、人づてに会社の評判が広がっていった。田中社長は発注者と受注者は対等であるべきだと力説する。

「昔ながらの発注と受注の関係では、決められたことしかやらなくなり。しかし、自分たちはお客さまに代わる立場で、いやお客さまの前に立つ立場と考えれば、おもてなしの質が変わってきます。弊社の現場のスタッフは毎朝のあいさつ時に取引先の企業に『おはようございます。今日はお客さまはいらっしゃいますか』と尋ねます。来客予定があればその前に念入りに点検し、雪が降っていればお客さまが通る道を除雪します。お客さまと私たちとの関係が良くなるほど、社員のモチベーションももっと上がります」

行財政改革の一環で、二〇〇三（平成十五）年に指定管理者制度が導入された後、同社ではPPP開発センターを設置して、指定管理者事業を少しずつ受託していった。これがさんびるの文化をさらに変えていったと田中社長は振り返る。

「ビルメンテナンス業は縁の下の力持ち

正面から会社と向き合って、千人を超える従業員やその家族、パートナー企業を含めた自分たちの幸せをつくる大きな責任を持つていることに気付かされました」

### 一人一人の声を聞き 会社に生かしていく

良い会社をつくるため、始まった取り組みの一つが、全社員参加の経営を実践する「アクセスメント循環」である。一月にマネジメント系社員で前期の見直しと後期の計画を立てる合宿を実施し、二・三月には全営業所でお客さまも呼んで経営方針発表会を行う。さらにキャップや全社員の研修の後、九月の中間アセスメントで再び見直しと計画を行い、冬はグループ幹部アセスメント、トップの山籠もり合宿と続く。このサイクルを毎年続けている。全社員研修はマグマが生まれる熱い議論の場で、真夜中までディスカッションを続ける社員もいる。

そして、同社ならではの特徴が、役職ではなく名前で呼び合う習慣だ。田中社長も会社では「正彦さん」と呼ばれる。名前で呼ぶことで親しみが増すからか、全社員との社長面談では家族や恋愛など、仕事以外の話を聞くことが多い。

ですが、指定管理者になってさんびるの名が表に出て、うちの社員が来館者と接することで、意識が変わっていきました。若い社員が別の世界でさんびるの文化を商品化してくれて、健康福祉やキッズ教室、体育教室などさまざまな事業が生まれ、大きな柱になりつつあります」

二〇一三（平成二十五）年には、新社屋に卓球塾、学童塾、健康塾のさんびるアカデミーを開設した。「子どもを預けられる場所をつくりたい」という社員の意見から生まれた事業だ。学童塾は小学校に近く、夏休みには八十名近くの子どもが利用する。また、さんびるでは全事業所の周辺二十メートルの範囲を社員が毎日掃除する。地域への恩返しとして最も大切にしていることだ。

「この掃除は社員一人一人が主人公となつて地域と関われる機会。ありがたい言葉がやる気を最も引き出してくれます」

環境が人をつくと田中社長は言う。人を育てるにはまず環境を育てなくてはならない。古い習慣を捨て、風通しの良い環境をつくることで、社員のエネルギーや意欲は何倍にも膨張していく。その相乗効果がさんびるの成長をしっかりと支えているのだろう。

# 鳥取を拠点にITで 地方に元気を創出するLASSIC

《鳥取市》

ITのシステム開発と人材育成に取り組むベンチャー企業として鳥取市で創業した株式会社LASSIC（ラシック）。IT技術とアイデアで企業や地域に貢献するとともに、IT事業の地方輸出によって故郷で自分らしく働ける、鳥取発の地方創生ビジネスモデルの確立を図っている。

## ■故郷の鳥取に戻って起業

株式会社LASSICは、現在代表取締役社長を務める西尾知宏さんが二〇〇六（平成十八）年十二月に設立したITベンチャー企業だ。鳥取県出身の西尾さんは、九州の大学で経営情報学を学び、卒業後、経営コンサルティング会社に入社。在職中に応募したビジネスプランコンテストの事業案が評価され、人材サービス会社の出資を受けて人材紹介の会社を起業した。その出資会社のグループ戦略によって三年後に吸収合併され、同社の大阪拠点の営業責任者として人材紹介や新規事業などに取り組んだ。五年間勤め、三十二歳のときに鳥取へのUターンを決意し、LASSIC

SSICを立ち上げたのである。「実家は梨農家で、梨の栽培に打ち込む父親の姿を見て育つうちに自ら納得できる仕事をしたいという思いが強まりました。その選択肢の一つが経営者だったのです。ですから、鳥取だったらどんな事業が起せるかを常に考えていました」と西尾さん。鳥取県は全国で最も人口が少なく、高齢化や過疎化などの課題が山積していた。その課題先進地の困り事解決の中にビジネスチャンスがあるとの発想が、鳥取での起業の原点だったと振り返る。「鳥取で成功すれば、全国どこでも展開できる。それを行えるのは自分しかないという妙な自信もありました」と笑う。社名と企業理念の「ら

しく」の実現をサポートする」を決め、ゼロから事業開拓に挑んだという。

## ■IT事業を地方へ輸出

LASSICは、地元鳥取の企業と自治体のWebシステムの構築支援やコンサルティングなどで事業を伸ばしていたが、設立二年後に危機に直面した。リーマン・ショックの影響で新規事業が止まり始めたのだ。西尾さ

んは事業獲得に向け、東京での営業力強化を図った。当時から日本のIT企業の八割以上は東京、埼玉、千葉、神奈川に集中していたがシステムエンジニアは圧倒的に不足しており、システム開発を鳥取へ移管するニアショア事業に活路を見いだそうとしたのである。

前職の人材サービス会社の元上司に相談したところ、同社で高い実績を挙げていた若山幸司さんを経営パートナーとして紹介された。その実力に惚れ込んだ西尾さんは、若山さんを代表取締役社長として招聘。若山さんが東京を拠点に開拓した事業



新事業メンタルヘルスケアサービスでは農業体験を研修プログラムとして提供



宮城県丸森町と「高度ICTを活用した移住・定住・交流促進に係るパートナーシップ協定」を締結  
「地方創生パートナーシップ協定」を結んだ岩美町の榎本武利町長（左）と若山幸司社長

を地方へ輸出する仕組みづくりを本格化させた。

## ■感情医工学研究所を設立

同時に、新たな事業としてメンタルヘルスケアサービスも開始した。地方での農業体験などを通じ、IT人材のメンタルタフネス（ストレス耐性）の強化と地域活性化を図る試みだ。

「人材サービス会社勤務時代から多くのIT技術者と接する中で、高い能力を持ちながらもストレスなどで心の病を患い、仕事から離れていく人を目にしました。当社にもそういう社員がおり、職場復帰を支援できないかと考えたのが発端です」と西尾さん。

自然が持つ癒やし効果に着目し、農作業に汗を流してもらったところ、社員の表情が明るくなり従来の業務が行えるようになった。手応えを感じた西尾さんと若山さんは、専門カウンセラーを採用して研修プログラムを開発し、二〇一〇（平成二十二）年一月からメンタルタフネス向上のビジネス研修を開始した。鳥取の古民家で共同生活を送りながら農業体験と健康管理やコミュニケーションを学ぶワークショップなどを組み合わせた五日間の研修で、後に鳥取県智頭町の

森林を活用した研修や首都圏近郊の静岡県熱海市でのリワーク（職場復帰）研修まで広がった。

二〇二二（平成二十四）年四月には、公立鳥取環境大学、独立行政法人国立病院機構鳥取医療センターと連携して感情医工学研究所を設立。心の健康増進を目的に、感情解析技術を活用した研究やサービス開発に着手した。

声や表情、脈拍、行動などさまざまなバイタルサインから総合的に感情を推定する技術とその感情状態に応じて適切に返答する対話の仕組みを研究し、それに基づき人の心を前向きにさせる対話ロジックプログラムを活用したサービス開発を進めている。

具体的には、社員の気分診断・感情コントロール、気分や感情をセンシングしたデータに基づく生産性向上などへの応用を図る。医療・介護分野での活用も進め、今年六月には「ロボット病棟プロジェクト」が中小企業等経営強化法に基づく異分野連携新事業分野開拓計画に認定された。認知症患者の表情や会話などのバイタルデータをIoT機器で集積し、その情報を医師に伝えることで医師の診断・処置などを支援するサービスで、その実用化を目指している。



解体危機にあった旧鳥取高等農業学校校舎を改修し、本社として活用

## ■地方創生モデルを目指す

そして二〇二五（平成三十七）年五月には、経営理念として「鳥取発（ITで、地方創生）」を打ち出し、中期経営計画を一新して「五〇の地域に、一〇〇〇人の仲間を」を二〇二〇（平成三十二）年の目標に掲げた。

「第二次安倍晋三内閣の『地方創生』を受け、鳥取で体現してきた『愛する土地で、自分らしくはたらく』の仕組みを全国に広げ、地方創生に貢献したいと考えました」と西尾さんは意図を話す。

地方創生採用と称してUターンや地方での事業に挑みたい仲間を募



西尾知宏代表取締役副社長



二十世紀梨栽培の技術開発が行われた旧鳥取高等農業学校校舎の記念碑

地域イノベーション支援事業に力を入れていくのも特徴だ。鳥取県岩美町や宮城県丸森町とIT技術者移住・定住・交流促進などのパートナーシップ協定を結び、地方創生モデルの確立を図っている。

今年三月には大正時代に建築された旧鳥取高等農業学校（現・鳥取大学農学部）校舎に本社を移転した。長年使用していた旧鳥取三洋電機株式会社校舎の撤退に伴って取り壊される計画であったが、LASSICが保存に一役買ったのである。百年の歴史を誇る校舎に本社を構えたLASSICは、鳥取の産業の新たな顔となった。

# 故郷・萩を拠点に独自のテーマを追求し 作品を撮り続ける下瀬信雄さん

写真学校卒業後、萩に帰郷し、家業の写真館を経営しながら創作活動を続ける写真家。

詩心を秘め、独自の視点で身近な自然に向き合う感性と高度なテクニクを融合させた作品は、土門拳賞受賞など高い評価を受けている。



## profile

下瀬 信雄 (しもせのぶお)

1944年旧満州で生まれ、萩市で育つ。1967年に東京総合写真専門学校を卒業して帰郷、以後、萩市でシモセスタジオを営みながら作家活動を続ける。1977年銀座ニコンサロンで個展「萩」を開催、以後も東京をはじめ各地で個展を多数開催し、写真集『萩・HAGI』(1989年)、『萩の日々』(1998年)、『結界』(2014年)を出版。主な受賞歴は1986年山口県芸術文化振興奨励賞、1990年日本写真協会賞新人賞、1998年山口県文化功労賞、2004年山口県選奨、2005年伊奈信男賞、2009年山口県美術展覧会大賞、2015年土門拳賞、2016年中国文化賞。

文:村上 郁子(山口県岩国市在住) 写真撮影:渡辺 久徳(山口県下関市在住)

## 写真館を継ぐために帰郷

城下町・萩の中心部に立つシモセスタジオ。古い建物が連なる町並みの中、純白の外壁と鋭角の屋根が静かに何かを主張しているような佇まいだ。かつて下瀬写真館と呼ばれていたこの写真館の二代目オーナーが、下瀬信雄さん。萩を拠点に独自の作品世界を追求し続け、数々の賞を受賞してきた写真家だ。

下瀬さんは旧満州の生まれ。終戦後一歳のとき一家で萩に引き揚げ、父親はこの地で写真館を始めた。長男として跡を継ぐことに暗黙の了解があったものの、自然と史跡に恵まれた萩で伸び伸びと育つた下瀬さんは、科学好きの少年時代を経て、中原中也の詩を愛読する文学青年に成長した。

だが、十七歳のときに父親を亡くすと、写真館後継者としての将来がわからなくなってきた。高校卒業後、東京総合写真専門学校に入学。写真館の経営は母親が従業員を雇ってしのいでいく中での上京だった。

入学後は写真技術の習得はもちろん、重森弘淹校長(作家・重森三玲の次男)をはじめとする多彩な講師陣から芸術家としての姿勢や思想を学んだ。



写真館のスタジオで大判カメラ

「二流の人たちの生き方を目の当たりにして、写真屋さんではなく写真家になりたい、と思い始めました」

刺激を受けて研鑽に励み、卒業時には重森校長から「助手をしながら東京で勉強を続けよう」と強く勧められたが、実家の状況がそれを許してはくれなかった。二十二歳の下瀬さんは未練を残しながら萩に帰郷した。

## 写真のテーマは身近にある

写真家に限らず芸術や創作活動を志す地方出身者には、今も昔も、強い中央志向がある。創作や発表において、刺激や飛躍のチャンスが満ち溢れているのは、やはり東京。まして地域格差が大きかった昭和四十年代、力量

がありながら帰郷せざるを得なかった青年の心境は察して余りある。だが、下瀬さんは諦めなかった。

「どこにいても写真は撮れる。テーマは身近にあると感じていましたから」

折しも、写真への認識が少しずつ変わり始めた時代だった。観光地を写したり、記念や記録のための写真を撮ったりといった従来の「用途のある写真」から、「写真によって何かを表現する」芸術性に目が向けられ始めていた。報道やコマシヤルの写真ではなく、「文字を使って文学作品を創作するように、写真を通して自分の思いを表現していけないだろうか」と考えた下瀬さんは、身近な自然や日常生活の中で心動かされる一瞬を捉え、撮影していった。萩の地で撮られてはいても、観光地の紹介写真ではない。撮られているのは下瀬さんの心だ。

## 地方在住で得られたこと

三十歳で結婚するといよいよ萩定住の覚悟を決め、写真館の仕事をこなしながら作品の撮影を続けた。焦りや不安も多少はあったが、「モノを創る人間が悩まないでどうする」とカメラ誌編集者から檄(げき)を飛ばされ、「詩人に不遇はつきもの、中也もそうだった」と、文学青年らしい言葉で自身を鼓

舞した。

一方で写真館の仕事にも奮闘し、「依頼があれば何でも撮りました」と、結婚式をはじめあらゆる注文に応えた。

とりわけ印象的だったのは、萩博物館編纂さんの『萩市の文化財』の撮影だ。天然記念物から歴史、民俗、美術、芸能まで幅広い分野の文化財をそれぞれの専門学芸員に同行して撮影し、全ての分野において細かな専門知識を得た。

「深く、しかも幅広く全体を捉えることができ、非常に面白かった。書物に記されていない史実にも触れられました」

地元で定評のある下瀬さんの博識ぶりは、この時代に培われたものだろう。「都会で撮っていたら、料理とか建物とか対象が細分化し、専門化してはいます。田舎にいたから否応なしに何でも撮ったし、興味を持ってやれるうちが華だな、と楽しんで仕事をしました」

穏やかな語り口の奥には、与えられた仕事に常に前向きに取り組み、そこで得た知識や技を作品制作に生かしていく気概が潜んでいる。会話やエッセーの中には、溢れんばかりの幅広い知識とユーモアが見え隠れし、下瀬節とも呼びたくなる。芸術家の孤高を



### 藤井酒造株式会社

創業 1863(文久3)年  
広島県竹原市本町3-4-14  
TEL 0846-22-2029  
http://www.fujiishuzou.com  
年間生産量 850石(153kl/8万5000升)



古い酒蔵を改修して作った販売スペース

## 14

《広島県竹原市》

# 純米大吟醸 龍勢 八反伍拾

牡蠣の塩辛 マスカルポーネチーズ

江戸時代、入浜式塩田の導入で塩の産地として大いに発展した港町・竹原。国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されたエリアには、塩田経営のほか廻船業、問屋業、酒造業など多角経営で財をなした商家の邸宅が立ち並び、往時の繁栄がうかがえる。

その一角にある藤井酒造は、江戸末期の一八六三(文久三)年に創業した。酒造りの一番の特徴は純米へのこだわりで、全国の酒蔵で数パーセントほどといわれる、純米酒だけを製造する全量純米蔵の一つである。もう一つの特徴は、食事を引き立てる酒を造ること。「そのためには酸が大切で、きれいな酸が生まれることでキレイのいい辛口の酒になります」と六代目蔵元の藤井義大専務は説明する。

今回紹介する名酒は、新商品の純米大吟醸「龍勢八反伍拾」。龍勢は創業銘柄で、竹原小早川氏代々の子弟の学問所であった龍頭山照蓮寺の湧き水を使ったところ、とてもおいしい酒ができたことからこの名がついた。新調されたラベルには、酒宴が取り持つ人の縁や和み、日の丸や地球をモチーフにし

た円が描かれ、龍の模様の凹凸が酒の風格を一層高めている。酒米の八反三十五号は線が細いながらも筋が通った小味のきく米で、協会七号酵母による爽やかな酸により、クリアな飲み口の後にじわつと味わいが広がる酒となっている。冷酒にすれば、涼しい酸味がさらに味わえるだろう。

この名酒と一緒に味わいたい料理が、牡蠣の塩辛とマスカルポーネチーズである。塩辛は、身が締まった濃厚な安芸津の牡蠣を数週間塩で漬けたもの。マスカルポーネチーズは、同じく乳酸菌を用いた日本酒と相性が良く、竹原の塩をふりかけ、県産わさびと一緒に味わうのがおすすめである。

一九〇七(明治四十)年の第一回全国清酒品評会で最優秀賞を受賞した歴史ある銘柄の龍勢。「商品としての日本酒ではなく、自信を持っておすすめしていきたい」と藤井専務は語る。和食だけでなく、洋食にも合う日本酒の良さを世界中の人に知ってもらい、日本酒を飲む人の裾野を広げていきたいと考えている。



シンフォニア岩国での展覧会「天地結界」で自身の作品を解説 写真撮影:下瀬 ひろ子



現在撮影中のシリーズ「つきをゆびさす」の前に



三角屋根が印象的なシモモスタジオ

気取るわけでもなく、多くの友人知人に囲まれ、吉田松陰を敬い続ける萩の気風を愛おしむように暮らす日々……。そうした中で創作への情熱を燃やし続け、粘り強く作品を撮り続けていった。

### 個展を重ね、作品集を出す

三十代のとき、撮りためた作品から銀座ニコンサロンで初の個展「萩」を開催したところ、評論家の目に留まり、カメラ誌で絶賛された。手応えを得た下瀬さんは少しずつテーマを広げて個展を重ね、さらに十年後、初の写真集『萩・HAGI』を出版。高い評価

を受け、一九九〇(平成二)年に日本写真協会賞新人賞を受賞した。当時四十五歳。史上最高齢での新人賞受賞で、遅咲きとも評されたが、「写真家として、なんとかやっていけるかな」と自信を得ました」と振り返る。

カラーで挑んだ「萩」シリーズの後は一転、モノクロで「風の中の日々」「九八(平成十)年に『萩の日々』を出版。二〇〇四(平成十六)年に山口県選奨を受賞した。

作品集制作に当たっては、構成はもちろん紙質・印刷など細部にまでこだわり、妥協は許さない。自作のペー

ジをめくるときだけは柔和な表情が鋭い目付きに変わるのも、そんな芸術家魂の表れだろう。

### ライフワーク『結界』

そして、二十年にわたって追い続け

てきたテーマ作品をまとめた『結界』を、二〇一四(平成二十六)年に出版した。

『結界』の被写体は植物など身近な自然だが、四×五インチの大判カメラを駆使した緻密な描写が際立っている。「大判カメラでありを効かせて撮ることで、写真にしかできない緻密な表現が最大限かせると考えたのです」『結界』のタイトルが象徴するのは、自然への畏怖だ。

『結界』はもともと仏教用語で、侵してはならない聖域を表すもの。日本では「占」「注連縄」などにこの発想が今も生きています。人知を超えた自然が作り出す造形を、聖域を定めて撮ってみようと思いました。『結界』という言葉は少年時代に知って以来、ずっと心に残っていました」

磨き上げてきた撮影テクニックと、文学に親しみ、思索を巡らせて培って

きた感性を融合させて完成したのが『結界』である。発行の翌年には、写真界を代表する土門拳賞を受賞した。

### 複数のテーマが進行中

ライフワークともいえる『結界』シリーズが高く評価された後も下瀬さんの創作プロジェクトは尽きない。一連のモノクロシリーズとは対照的なカラーの現代アート作品で二〇〇九(平成二十一年)に山口県美術展覧会大賞を受賞した後、現在もカラーでさまざまな「人」を体感的に撮り続けており、下瀬さんの引き出しの豊かさが伝わってくる。

「テーマは『つきをゆびさす』。指月は仏教用語で、月という真実を指しているのに指先にとらわれることのとえで、実は写真はこの行為によく似ている……」と、写真を前に静かに続ける下瀬さん。その創作意欲は、こんこんと湧き続ける泉のようだ。

村上 郁子(むらかみいこ)  
1958年山口県生まれ。フリーライター。大学卒業後、大学研究室勤務を経て、各種雑誌や自治体・企業の広報・情報誌、記念出版物などの取材・執筆・編集に携わる。

# 平櫛田中

[1872-1979]

## 百七歳まで現役で活躍

## 写実を基にした描写力

平櫛田中は一八七二（明治五）年、現在の岡山県井原市に生まれた。時代は江戸から明治に代わってわずか五年。山陽道に沿った土地に本名・田中倬太郎として生を享けた。両親や弟妹に囲まれた幼少期を井原で過ごし、十三歳で養家先の平櫛家が住む現在の広島県福山市今津町に移ったが、わずか一年余りで商売の修業のため大阪に出た。二十一歳でかねて関心のあった木彫の手ほどきを受け、彫刻家を志す。以後、百七歳で逝去するまでの八十六年間彫刻家として活躍した。稀な長寿を生現役で過ごすことができたのは、明治生まれの進取の気性と気骨を有し、困難なことがあっても、自分の好きなことを貫徹する強い意志と、常に美しいものに触れて瑞々しい感受性を失わなかったことによるものであろう。

二十三歳の時には古彫刻の名品を自分の目で見るため奈良に滞在し、訪れる人も稀であった寺社仏閣の古仏を見て歩いた。二十五歳で上京し、高村光雲門下で双璧をなすと謳われた山崎朝雲、米原雲海らと共に研鑽を重ね、木彫界の新しい潮流に身を投じて、写実を基礎とする新しい芸術の創造に邁進することになる。以後十数年間にも及ぶ研鑽の集大成が《幼児狗張子》。長男俊郎が一歳のころのあどけない姿であるが、写実を基礎にした優れた描写力に圧倒される。幼児の一瞬のしぐさを捉え、伸ばした手の先の空間をも作品に取り込みながら、生命の輝きを余すところなく彫り出している。

十年間の歳月を経て完成した時、平櫛は八十六歳になっていた。歌舞伎役者六代目尾上菊五郎の名舞台《鏡獅子》を主題とした彩色木彫は自身の集大成として、全身全霊をもって制作

した。強大なボリュームと踊りの躍動感、空間を切り取る視線、揺るぎない強靱な造形は、彩色を施すことで周囲に一層エネルギーを放つ。その後、逝去までの二十年間いく



《灰袋子》を制作中の平櫛田中

ある大法寺の住職で、請われて東京で臨済録の提唱を行っていた。現在の大学の夏期講習のようなものだが、説法の会場は禅の教えを求める人々で熱気に満ち、芸術家、政治家、力士、落語家まで幅広い人たちが禾山の人格に惹かれ、参列した。

## 深みのある表情を持ち 人間味が溢れる彫刻

さらに三十六歳の時、岡倉天心の指導を受けることになる。天心は横山大観らを育て、日本画には一応のめどがついたと考え、木彫の振興に力を入れるため、高村光雲に有望な若手の推薦を依頼し、平櫛はその選抜メンバーに選ばれた。天心の指導により、新たなテーマに取り組み、禅を主題とした作品が生まれた。《尋牛》である。禾山和尚から聴いた禅の説話が平櫛の内部で十数年の歳月を経て熟成し、天心の示唆により造形された。人物の表

情には深みがあり、全体のシルエットが美しく、老人の視線の先を想像させる空間処理が見事である。

平櫛の彫り出す人物は美男美女には描かれていない。しかし、どの人物にも人間味があり、しみじみと見惚れさせる魅力に溢れている。禅の登場人物はどこか世を達観しているが、そこはかたないユーモアを漂わせる。平櫛芸術に通底する一つの主題と云ってよいであろうか。

## 彫塑研究を経て スケールアップした作品

天心没後、壮年期の平櫛は中原二郎ら、年の若い仲間たちと共に裸体をメインとした彫塑研究に入る。粘土を用いて造形することには慣れていたが、あくまで木彫に仕上げるまでの前段階としてであり、内部から盛り上げていく量感の表現には苦闘した。しかし、三年間続いた研究と実践は実り多く、造形の骨格を得て、作品はスケールアップした。前半生の代表作《転生》は二メートルを超す大作で、引き締まった肉体美と高い精神性が相まって、見る者に感銘を与える名作となった。

つもの作品を手掛け、一九六二（昭和三十七）年、九十歳で文化勲章の栄誉に輝いた。平櫛の生涯は近代木彫の大道を行くものでありながら、後半生の作品は必ずしも理解されていたと

は言い難かったが、美術の枠組みが広がった今の時代に至って再評価が著しい。その魅力は一層の輝きを増し、遺された作品は人々を惹きつけてやまない。

（文・青木寛明）



《試作鏡獅子》 昭和14年 木彫彩色 ※大作《鏡獅子》は東京・国立劇場で展覧



《転生(部分)》 大正9年 ブロンズ



《幼児狗張子(部分)》 明治44年 木彫



《尋牛(部分)》 昭和25年(大正2年作の拡大彩色バージョン) 木彫彩色

※掲載作品は全て井原市立田中美術館蔵

青木 寛明 (あおき・ひろあき)

1971年岡山県生まれ。1995年より井原市立田中美術館勤務。《鏡獅子》をはじめ代表作84点で平櫛芸術を回顧した「平櫛田中展—故郷・井原—」、日本の美しい風土と水の間を近代日本画でたどった「水のある風景」、友好親善都市・大田原市の竹工芸を紹介した「竹工芸の人間国宝・勝城蒼風(かつしろそうほう)展」等の展覧会を企画。

# 明君家訓

東京大学史料編纂所 教授

## 山本博文

江戸時代、八代將軍徳川吉宗は、側用人偏重の政治体制を改め、破産状態の幕府財政を再建すべく享保の改革を推進した。その吉宗に仕えた儒者・室鳩巢による『明君家訓』には、武士や家臣のあるべき姿が綴られている。



室鳩巢  
「肖像集 六」(画・栗原信充、江戸時代後期)より  
画像提供:国立国会図書館デジタルコレクション

### 室鳩巢の『明君家訓』

江戸時代の武士の間でよく読まれた武士道書に『明君家訓』がある。この

なく、大事に臨んでは必ず時の模様を見合わせ、自分の得になるような立場を選ぶ。

「命を捨て、ここぞという時の用に立つ」という武士には「真実の志」がない。一命を捨て、ここぞという時の用に立つなどとはまったく思っていないので、こういう者は、「大いに政教の妨げ」になるといえるのである。現在でも、似たような人がいるかもしれない。

### 武士の職務は「義理」

『明君家訓』には、「義理と申すもの一つをば、士の職と定め申す事にて候」と書いてある。武士の最も重要な職務は義理を貫くことだった。

義理には、色も香りもない。だからそれを職務とする武士は不用なもののようにも思われるが、義理がなければ人々に廉恥の心がなくなり、互いに欺き、互いに掠め取るようになり、ついには子が父を父とせず、臣が君を君としくなってしまう大乱の時代になることもあるという。

したがって鳩巢は、「得になるとか損になるとか、そのようなところを気にしないで、ただ一筋に自分の信じることを行ってこそ、義理が立つのである。だから、義理にさとい者は利欲にはうとく、利欲にさとい者は義理にうといものだ」と論ずる。自分の損得を度外視

武士はどうあるべきか

仕え、足利氏の軍勢を悩ました楠木正成が家臣たちへ示した教えという意味だが、もちろん本当に楠木正成の教えというわけではない。

『明君家訓』の特徴は、明君(優れた主君)が家臣に対して、武士はどのようなあるべきかを説くという形式をとっていることである。理想的な主君が家臣に何を求めているかを書くことによって、武士としてあるべき家臣として間違いない行動を求めたものということができる。

### あるべき武士の姿

あるべき武士とは、「いつも怠らず節義(節度と義理)を実践」する者であった。

節義のある武士とは、「嘘をつかず、私利私欲に走らず、心を素直にして上辺を飾らず、作法が乱れず、礼儀正しく、上にへつらわず、下をあなどらず、自分がなした約束を違えず、人が苦しむ立場に立った時は見捨てず、期待に違わず頼もしくあつて、かりそめにも下々のつまらない話に加わらず、人の

父母妻子兄弟を密告するような者は、武士として好ましくないと考えているのである。

もちろん、「国法」に背き、不忠を企てるような者を隠し置いたり、積極的に手を貸して罪を逃れさせようとすれば、それはよく調査した上で処罰すると言う。また、反逆の企てをたくらみ、主君を害そうとするようなことであれば主君の味方をするべきで、友人を主君の上に置いてはいけない。しかし、そのような恐ろしい企てであったとしても、子が親を密告するようなことはしてはいけないと言っているのである。

もともと孔子の教えである儒学は、主従関係には比較的ドライで、子の親に対する孝に一番の価値を置く。しかし、これが中国的な思想の影響かといえば、そうとも言えない。親しい者を密告するような者は武士の風上にもおけないという武士的な感性を窺わせるからである。

この条項を「明君」は、次のような言葉で締めくくっている。

「たとえ父子兄弟であつても、罪人であれば申し出るようにと定めてこそ、余のためにはよいのだけれども、武士の風儀はそのようなものではよくない。そうして余の考えは、それぞれの武士が立てている義理をまげてまでも、余

悪口などは言葉の端にも出さず、そうして恥を知り、首を刎ねられたとしても自分がしてはならないことはせず、死すべき場に立った時には一足も引かず、つねに義理を重んじて、その心は鉄石のごとく強く、また一面では温和慈愛で、もののあはれを知り、他人に情けある者」だという。

興味深いのは、ふだん節義のある武士だと思われていても、その実体は違う人もあるという記述である。

才智があり、人並み以上の勇氣もあつて、自分の役儀に精を出し、同僚の役儀であつても、その同僚が苦勞していると思えばそれを引き受けて行う人がいる。それだけ見ればたいした武士である。しかし鳩巢は、その行動が自分の「名利」のためだとすればどうだろうか、と問いかける。

役儀に精を出し同僚の分までやることは、自分の名を上げ、出世という利を取るために行っている場合もある。こういう武士は、頼もしい人柄のように見えるが、もともと主君におもねる「佞人」だから、「一筋に義理を守る心」が

のために忠節をいたせとはまったく考えていない。余に背いたとしても、自分の義理さへ違えなければ、余はよいことだと思ふ」

主君でさえこういう考え方とするのだから、現実の武士は、密告は恥ずべきことだと考え、密告して取り立てられた武士とは交際しなかつた。

現在に当てはめて考えると、これは不正が行われている組織での内部告発に相当する。内部告発は、社会正義のために必要なことで、政府は内部告発者の保護や権利を擁護する法律を制定している。しかし、こういう觀念が受け継がれているとすれば、法律で擁護されたとしても告発者は世間の冷たい視線を浴びがちである。おそらく世間の評価は、その告発が、「名利」のためか、あるいは純粹に社会正義のために行われたかどうかによって変わってくるのだと思う。

### profile

山本 博文 (やまもと・ひろふみ)

1957年岡山県生まれ。東京大学文学部国史学科卒。同大学院修了。博士(文学)。東京大学史料編纂所教授。専門は日本近世史。1992年『江戸お留守居役の日記』により第40回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。『歴史をつかむ技法』(新潮新書)、『武士道の名著-日本人の精神史』(中公新書)、『現代語訳武士道』(ちくま新書)など著書多数。NHK・Eテレ『知恵泉』『ラジオ深夜便』などの歴史番組にも出演し、映画やテレビの時代考証も担当している。

# 大山 だいせん

《鳥取県》



剣ヶ峰を頂点に弥山、槍ヶ峰、三鈴峰などのピークからなる大山 立体地図制作 (カシミール3Dを使用) : 磯部 祥行

穏やかな山々が多い中国地域の最高峰である大山。標高一七二九メートルの剣ヶ峰を頂点に、弥山、槍ヶ峰、三鈴峰などのピークからなる。

大山は古くから山岳信仰の対象で、一般人の入山は長らく禁止されてきたが、一九三六（昭和十二）年に国立公園に制定され、多くの人が訪れるようになった。

現在は火山体の解体期にあり、江府町や日野町あたりから眺める南壁や、北壁、東壁では頻繁に崩落を繰り返し、険しい山壁が作られている。かつて行われていた弥山、剣ヶ峰への縦走も、崩落による危険性や植生保護の観点から規制されており、現在は弥山を頂点に登るコースが中心になっている。

夏山登山道入口から緩やかに登っていく、三合目あたりで大きなブナ



弥山の頂上 写真提供：鳥取県



剣ヶ峰 写真撮影：河野 利晴

の森が現れ、行者谷分れを過ぎると、避難小屋のある六合目に着く。ここは東に宝珠尾根、北に日本海が望める絶好のビュースポットだ。

八合目付近から天然記念物のダイセシキヤラボクも見られるようになり、さらに木道を進んでいくと、大山頂上碑のある弥山（二七〇九メートル）の頂上へ。頂上からは剣ヶ峰への稜線、烏ヶ山、蒜山の山々が望め、空気が澄んでいるときには隠岐島や三瓶山、四国の山並みも眺めることができる。

大山は午後になるとガスがかかることが多いため、頂上からの展望を楽しむには早朝からの登山がおすすめです。